

小峯和明さんのフットワーク

藤井 淑禎

先日、新入生の保証人を招いての懇談会の場で、もう鎌倉に文学散歩に行くことはないのでしょうか、と一人のお母さんから尋ねられて答えに窮したことがあった。たぶん、今年の新入生歓迎文学散歩（向島周辺）を楽しんだ一人が、鎌倉にも行ったことがあると聞いて、今度はぜひ鎌倉にも、と期待をふくらませて家庭でそのことを話題にした結果が、上記の質問になったものとみえる。

そんなことが印象に残ったのも、実はこの鎌倉への文学散歩は、小峯さんと私とが引率した散歩だったからである。小峯さんが『日文ニュース』（第十五号）に書かれた散歩記によると、それは二〇一〇年五月一六日のことで、教員の参加はなんと我々二人のみ。遠方であることがたたってか学生も予定の人数に比べるとだいぶ少なく、氣勢の上がらぬままに歩き始めたが、中途からは小峯さんの気迫と脚力にぐいぐい引つ張られるかたちで、鶴岡八幡宮↓極楽寺↓長谷寺↓鎌倉文学館のコースを一人の落伍者もなく踏破した（ただし極楽寺までは江ノ電利用）。

特に私が驚かされたのは、極楽寺で降りてからの、そうとうの難路を何ら苦にすることもなく、急な坂を、登り、降り、かつ解説する、その迫力であった。小峯さんが机上だけの学者ではなく、行動力にも富んだ研究者であることはもちろんよく承知しているつもりだったが、私が知っていたのは、もっぱら、中国、韓国、アメリカ、ベトナム、フランス、アイルランドと、国文学研究資料館時代の延長線上での海外への東奔西走ぶりだったから、それとは別に、実際のフットワークにおいても超人的であることを目の当たりに見せつけられて、舌を巻いたというわけなのであった。私などは話にしかなかったことがない中国山西省の高峰五台山などにも仏教遺跡を求めて何度も登られたというのも、このフットワークがあればこそそのことだということがよくわかる。

小峯さんが立教大学に着任されたのは一九九五年のことだが、私の印象ではその頃の小峯さんはまだまだ普通

の（レベルではなく、扱う範囲が）中世文学研究者であったように見えた。しかし、その後、研究分野の離れている私には正確な時期まではよくわからないけれども、あれよあれよという間に巨大な存在へと変貌をとげていかれたようだ。当初の『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の研究から出発して、絵巻や説話の享受や伝承空間、そしてその中心にある仏教思想の研究、さらにはそれらのアジアにおける伝播の探索へと、小峯さんの研究は、扱う範囲と方法をどんどん拡大させて、いい意味でのモンスター的学者へと小峯さんを押し上げていったと見える。

小峯さんはまた、国際シンポジウムのたぐいにも実に熱心に取り組み、みずから主催もすれば、どんどん出かけても行くという八面六臂の活躍ぶりです。私も何度かご一緒し、その発表を聞いたこともある。いちばん最近のそれは、二〇一二年夏に中国清華大学でおこなわれた「東アジアの文化交流における旅の表象」の国際シンポジウムで、小峯さんはそこで「天竺をめざした人々―異文化交流の文学史・求法と巡礼」というタイトルの、実にスケールが大きく、かつ問題性豊かな、完成度の高い、一種集大成的な発表をされた。ここでは文字テキストと口承文芸・絵画テキスト、文学と歴史・宗教、アジアと日本、といった、小峯さんがモンスター化する過程で自家薬籠中のものとしていったさまざまテーマや方法が総動員され、さらに時代的には九世紀から二十世紀までが射程に収められるという大変な規模のもとに、アジアにおけるインドへの旅の系譜が辿られていたのである。国際シンポジウムでこのように異分野の発表を聞くのは珍しくはないが、専門の壁を越えてここまで共感できたのは私にとってきわめて稀な体験であった。

ご退職後も小峯さんとは学内ではしばしばお目にかかる。兼任としての授業なり研究会で来られているのだが、以前と少しも変わらずお元気そうであるのは何よりも喜ばしいことである。足もとに用心しつつ歩いている私などとは違って、あのフットワークも健在であるようで、現役時代と比べて少しは自由になる時間も増えたこれからは、鎌倉でのあの脚力と迫力でもってますますスケールの大きなお仕事を見せたいと思ふ。